

電車に乗ってどこへ行こうか

村上 まさみ

(目次)

- 0 . はじめに
- 1 . 動機 : どうしてイワンさんの話を聞きたいと思ったのか
- 2 . インタビュー
 - 2 - 1 少年のようなやんちゃ性
 - 2 - 2 「自由」について
 - 2 - 3 故郷の町
 - 2 - 4 大切なこと
 - 2 - 5 目的は知らない 大切なことは考え続けること
 - 2 - 6 電車のライフ
- 3 . 結論
- 4 . おわりに

0 . はじめに

このレポートでは日本社会に暮らす私にとって魅力的な人を選び、その方へのインタビューを基にその魅力について語った。筆者はイワン・スバルコさん(仮名)にご協力をお願いした。私は2003年2月からイワンさんの日本語学習のお手伝いをしている。

イワンさんは来日歴11年になるウクライナ出身の45歳の男性である。モスクワの理科系大学で博士として研究職にあった彼は、交換留学でT大学に来る。そして彼は原子力物理の博士号を取る間、妻と幼い息子をモスクワから呼ぶ。博士課程修了後は日本の原子力開発の中核である茨城の研究所でプラズマ物理の研究に携わってきたが、2002年都内企業にその研究実績を見込まれて招かれ、技術部長としての職に就き現在に至る。ちなみに今年の夏、息子さんはモスクワで結婚され、今は東京で奥さんと2人の暮らしだ。

1 . 動機 : どうしてイワンさんの話を聞きたいと思ったのか

「魅力的な人物」とは自分にはない「何か」を備えた人だと思う。イワンさんが持っている「その何か」と言っても茫漠としているので思いつくままに挙げてみる

まず彼の表情である。彼の目には常に生き活きとした表情が表れている。そして常に穏やかで安定しており、会うとほっとする。彼の内面的な安定が私にも伝わってくるようだ。そして、ユーモアがある。いつも悪戯っぽく何か冗談を考えているようだ。絶妙なタイミングで飛び出す冗談には、つい噴き出してしまったり、互いに顔を見合わせてにやっとなったり…。そこには、ものごとを多面的でクリティカルに見るウィットを感じる。

何より印象的なことは、自分の世界を持っていることを感じさせる点だ。彼の話すことばはとてもシンプルで、コミュニケーションを図る術を知っている人だと感じる。彼のことばで語られた様々な高等物理は、全く物理音痴の私でもおもしろく感じられるのが不思議だ。彼の専門である「物理」について語る彼からは少年のような純粹さと情熱が伝わってくる。一方、い

つも同じことばの使い方を間違えて忘れたと笑う「覚えない」彼がいる。ノートを作っても、本に印をつけても覚えない。「覚えられない」のではなく瑣末事項は「覚えない」という彼の選択なのだと思う。私は次第に彼の自分の興味関心に素直に生きる自由な気質が見られるように思い始めた。私にとって自由であることは、生きる上でのひとつの理想のスタイルである。人は人と共にしか生きられない。人と共に生きるとは即ち自分と社会とに関係を結ぶことだ。それは、時として自分のスタイルを保つことを容易でないものにもする。いつか私は大人になるということがまるで自分の居場所を固めるために自らの自由を切り売りするような寂しさを感じるようになっていた。彼が感じさせる自由さは、時として彼をやんちゃにも見せ、彼の穏やかで安定感のある成熟した雰囲気との落差がおもしろく思われた。

私が彼に感じた自由さとは一体何だろう。本当に彼を自由な人であると言うことができるのか。そこで、「自由」をキーワードに、彼を追ってみることにした。

2. インタビュー

2-1 少年のようなやんちゃ性

私はイワンさんのユーモアが大好きだ。そして彼に「やんちゃなおもしろさを持つ自由な気質」をその魅力として見てきた。例えば、問いかける私の期待を察知し、わざわざポイントを外して答えるような茶目っ気がある。決して嫌みのないその笑いはコミュニケーションを滑らかにする。私もそうしたコミュニケーション・ゲームを楽しんでいる。しかし、ある日、イワンさんの小学校時代の算数の時間の回想を聞き、少年の日のやんちゃな姿を垣間見たのだった。

イワンさんは外で遊ぶことが大好きで、教室ではエネルギーが有り余るタイプの子もだったらしい。ある日、授業に集中していなかった彼は、先生に指名され前に出て算数の問題を解いた。彼は黒板に先生がまだ教えたことのない別の解き方で正しく解いた。その頃からイワンさんは授業で習ったこと以外の解法を見つけることが面白かったのだそうだ。先生は大変驚き、以来イワンさんには別の難しい問題をくれるようになった。そしてイワンさんは数学に夢中になっていったという。彼は当時を「私は、本当にいい先生に会った」と語った。これを聞いたとき、彼を動かすものは「彼自身の関心」以外にないのだと感じた。素直な好奇心をまっすぐに持ち続け、絶えず関心のある方に目を向けている。「こうしなければ」という枠を持たない自由な気質は、小学校では教師にとっての問題児だったかもしれない。けれど、その破天荒さが彼自身を伸ばしてきたのに違いない。

好きなものはなんですか？

スキナモノ？ うーん、むずかしいねえ。...

じゃ、嫌いなものは？

キライナモノ？ それに答えるのはもっと簡単だね。全然ない！ あはは、いや、それは冗談で、病院は嫌い。

イワンさんはにこにこしながら私を覗き込み、欲しいものはそう簡単には渡さないとばかりに次のことばを待つ。こんな悪戯っぽさはイワンさんの少年の日の茶目っ気溢れるやんちゃ振りそのままではないか。イワンさんの悪戯心には、型にはまることを疎み、規範に縛られまいとする自由な気質がこめられているように思われた。

2-2 「自由」について

「自由な人」というのは、私の憧れの一つだ。そして自由に生きるためには強さが必要であると思う。私の目にとても自由な人のように映るイワンさんは、「自由」についてどんな考えを持っているのだろう。そこで単刀直入に尋ねてみた。

「自由」とはどんなものだと考えていますか。

自由、それは何ですか。自由。それは皆さんの中にイメージはあります。例えばアメリカの国の Freedom。でもこれは皆さん違う。難しい質問。

イワンさんは「自由」とは何かと問い返し、「それはみなさんの中にあるイメージ」だと続けた。確かに「自由の国アメリカ」ということばに「何が自由なのか？」と言いたくなる。「アメリカの国の Freedom」について実体があるように説明することなど無理な話だ。その穏やかながら厳しい問い返しに答えられずに黙っていると、彼は続けて話し始めた。

ずっと昔。人が動物を狩って食べていた頃。みなさんには自由があった。でもみなさんはいっしょに住んでいた。

個別に生きる自由と引き換えに、共同体での制約を選択して生活の利便性を得るか。

そして、その中からリーダーが生まれた。でも、そこでは、みんなが話して、いろいろ決める。ここには自由がある。じゃ、国。政府がなかったら、これは一番いい Freedom。でも、これでは、マンモスの時代と何も変わらない。だから、自由、というのは皆さんの中にあるものです。

「国や政府がなかったら、これは一番いい Freedom だが、これではマンモスの時代と何も変わらない」という視点を意外に思った。私はイワンさんの中に、「型にはまることを疎み、規範に縛られまいとする自由な気質」を見て魅力的に感じた。しかし、このイワンさんのことばは、「型」としての「国」、「規範」としての「政府」を肯定的に捉えるものだ。私が彼に抱いていたイメージとは逆向きではないか。さらに、「自由というのは皆さんの中にあるもの」ということばにはっとした。

自由は私たちの中に？

はい、村上さん。「自由」、このことばは英語には Freedom と Liberty の二つのことばがある。でも、「Freedom」だけには意味がありません。「Freedom of ~」「Freedom from ~」ということばになって意味があります。もちろん、私の中にも、外にも「Freedom」はある。中の Freedom はいちばん大切なことです。

私たちの中にも、外にも「Freedom」はある...

そうですね。例えば、前のロシアで、外の Freedom はなかった。でも、私の中には、「Freedom

from Communist Idea」, 「Freedom from Ideology」があります。今アメリカでブッシュさんはアメリカには「Freedom」が「Democracy」にあると言っています。でもこれは、ことばの意味が違います。

「アメリカの国の Freedom。でもこれは皆さん違う。難しい質問。」ということばのメッセージが見えた。ブッシュさんが言うことばの意味の異なる「Freedom」とは「外にある自由」だ。イワンさんは一人一人が感じて獲得しようとする「中の自由」と、イデオロギーとしての「外の自由」とをはっきり分けていた。私は「民主主義政治」は市民の自由の権利を保障する政治だと教えられる一方で、その「自由」の意味については考えてこなかったのではないだろうか。私の自由に生きることへの憧れは生きるスタイル、つまりイワンさんに拠るところの外側の自由が持つ格好よさばかりに目が向いているように思われた。イワンさんの語る「中の Freedom は一番大切なことだ」ということばが深く私の心に沁みこんだ。

イワンさんが私を惹きつけた魅力は、当初私が考えたような、身につけるような形だけの自由を好むような単純なものではないことが見えてきた。すると彼に見ていた「やんちゃ性」は薄れ、「私の中」と正面からしっかり向き合う人の剛柔さが新たな彼の魅力として見えてきたのである。

2-3 故郷の町

イワンさんの安定感は彼が「私の中」と向き合ってきたことに拠るのだろうか。「私は Happy man」と言う彼に、その幸福感の拠り所について尋ねると、イワンさんはいつでもいろいろな人が近くに居てくれることだと答えた。

幸せな人。そう。子どもの時から、いい先生に会い、いい友達もいた。早く家内に会って、息子が生まれた。いつもいろいろないい人が近くにいてくれるから、問題がないんだね。私の故郷はウクライナの小さな町。そこで初めての学校で机を並べた友だち、町の人々。17歳から町を離れた私だが、故郷の町に帰ればみんなが私のことを「ああ、イワン!お帰り!!」と迎えてくれるんだよ。生まれた町というのは本当にいいものだね。

これ聞き、私はイワンさんがウクライナのその小さな町で、家族に、友人に、大人達に恵まれて育ってきたということをまるごと受け止めているのだと素直に納得した。そこは今も変わらず彼に安らぎを与えるところなのだ。イワンさんから故郷への誇りと、彼が過ごした豊かな子ども時代を大切に思う気持ちが伝わってきた。懐かしげに微笑む彼に私は羨ましさを感じた。私の生まれた町はもうないに等しいからだ。私は東京近郊に生まれ、転居を繰り返した。私が子どもの頃に遊んだ原っぱや林はもう残っていない。

イワンさんは、ウクライナの生まれた町全体が家のようなところで、そこには人々の夢や満足感があるという。しかし、彼は次のようにも言った。

自分の子ども時代は共産主義の時代であったが、そこで人々は生活し、仕事を持ち、裕福ではなくても幸せがあった。しかし、古い時代から新しい時代に変り、お金を持つことが幸運で

あるという世の中となった。心を変えなければならないことは難しいことで、それが今の若い人たちにとって問題になっている。さらに大きい問題は、ソ連崩壊に伴いこれまで一つの国の住人として暮らしてきた家族や親戚が別々になってしまったことだ。

そのイワンさんのことにはウクライナだ、ロシアだと線を引くことの無意味さを訴えるような強いものを感じた。

故郷との強いつながりから、話は思わぬ方向に向いた。私はなんのてらいもなく「日本人」であると口にするが、イワンさんが語るような温度で自分の国や民族を感じたことはあるだろうか。心を変えなければならないような、また家族が別々になってしまうような大きな時代の流れを現実を受け止めながら、イワンさんが私の知らない厳しさの中で人生と幸せについて見つめてきたのだということが少しずつわかってきた。思わず私は自分の家族や親友など、大好きな人々を思い浮かべた。

2-4 大切なこと

イワンさんの話から彼は家族や友人など人をとても大切にしていると感じた。そこでそれを確かめるため、何をいちばん大切にしているのかを尋ねてみた。すると「教会」だという。イワンさんの現在の生活には、教会が欠かせないものであることはよく知っていた。彼はロシア正教の敬虔な信徒である。生活は教会の暦と共にあり、毎週礼拝に行き時には食事制限もする。

イワンさんが教会に通うようになったのは結婚してしばらくしてからだそう。ペレストロイカ以降、社会的モラルや価値観が変わった。その結果若い人たちは、信じるものを失い、お金だけが信じられるものとなっていったとき、イワンさんはそのような人生観が好きになれなかった。自分が裕福であっても周囲に食べられない人や教育を受けることのできない子どもがいたら、幸せを感じることはできないと考えているからだ。彼は、新しい時代を生きるため、自分には新しいアイデアが必要だと感じることが、自分たち家族を次第に教会へ足を向けさせたのだといった。彼を教会につないだのは息子さんが友人に誘われて通いだした日曜学校だそう。ある時息子さんが聖歌隊で歌うことになり、ご夫婦でそれを聞きに行った。そこで同席した人との会話から、人生について自分が知らないことがここにはあると思った。それから、少し本を読み、ゆっくりと考え、考えることには本当のことがあると思ったのだという。確かにイワンさんの「Happy man」であるとか「中の自由」という考え方は、キリスト教的思想の影響によるとする見方もあるだろう。しかし、彼の「考えることには本当のことがある」ということばに私は本当のものを感じた。

彼は「考えること」が目的で教会に行くのだろうか。

2-5 目的は知らない、大切なことは考え続けること

そこでもっと具体的にイワンさんの価値観を聞きたいと思い、今の生活の目的は何ですかという質問をした。すると、彼は即座に「それは仕事」と答え、それに念を押すようにゆっくりと続けた。

生活の object は仕事と家族。これは一番大切だと思います。

イワンさんは目的の部分を object と表現しなおしたので、あるいは「対象」と捉えた方がよいかもしい。すると、生活 = 家族、あるいは生活 = 仕事、ということになるのだろうか。家族についてはよいとして、仕事については、少し意外に思った。私にとって仕事とは生活のための手段であり、目的そのものでなく感じられたからである。そこで、それは会社の仕事のことかと問うてみると、直接の会社の仕事に限らず、物理について考えたり、物理の雑誌を見て新しいニュースがないか探したりすることなども仕事だという。私の納得のいかない顔を見て、笑いながらイワンさんは次のように話した。

- 村上さん、仕事は生活のお金のためにするのだと思っているの？もちろん、私の中にはコミュニスト・イデオロギーが入っているよ。＜笑＞ だから、お金は大切。でも、もっと大切なことを言います。お金が少なくても、仕事はとても面白いものです。

もちろん、私はイワンさんがコミュニスト・イデオロギーに染められてそのように考えているとは思わなかったが、いたずらっぽい目で笑う彼につられて笑いながら、気がついた。仕事とはお金で自分を縛るものではないということだ。直接収入とつながってなくても、自分にとって意味のある活動は仕事と言うべきかもしれない。例えば、現在私はここで学生生活を送る中、たくさんの課題を抱え、それを仕事として取り組んでいることに思い当たった。「人生の仕事」。それは生き方につながる大切なことだ。おや？イワンさんは「仕事の縛り」から「自由」な人だとも言えそうだ。「お金は大切。でももっと大切なことがある」ということばがそれを教えてくれた。

また、インタビューの間、イワンさんは繰り返し「考えること」ということばを使った。そして教会を一番大切なものだとする理由については、次のように述べている。

前に、自分は物理の専門で、なんでもわかっていると思っていた。でもその人¹と話しているとき、私はライフについてあまり知らない、と思いました。それから、私はだんだん本を読んで考えた。本当のことがある。考えた結果、自分がライフをもっと易しくもっと難しくなるか、それはわからない。時々人は、ある行動がわからない。どうして、そうしたのか。しかし後で少しわかる。いろいろアンサーはある。もし、神様を信じれば、もっとたくさんアンサーはある。これは私は思う。一番大切なことは見つけれられない。もし、あなたが一番大切なものを見つけたら、病院へ行ってください。＜笑＞

彼のことばから、私には彼にとって「神様」の存在は彼が考え続ける上でヒントを与えてくれる支援者であるように感じられた。私は彼のこのことばから一番大切なことは考えることだというメッセージを見つけた。

2-6 電車のライフ

将来はどうしたいですか？と尋ねると即座にイワンさんは「将来はロシアに帰りたい。そして、いい仕事をしたい」と答えた。今の会社にこれまでの研究職とは異なる職種で招かれて、

¹ 初めて教会を訪れた時に同席した一人の信者（筆者注）

仕事を請けるに当たり少し不安があったそうだ。いずれ、物理の仕事に戻りたいのか、と聞くと、イワンさんは今はわからないと答えた。そして、自分の状況を電車にたとえて話してくれた。

その電車には、友だちも、食べ物も、飲み物も全部が揃っていた。ある駅で、電車は止まり、私は降りた。その電車は次の駅へ行った。電車を降りて、外からそれを見てみると、古くて窓も汚く、もうすぐ壊れそうな古い電車だった。私は電車を降りた駅でいろいろおもしろい人に会い、周辺の庭や森やたくさんの花を見て、これまでの電車でのライフと全く違うライフを見つけた。

つまり、ポイントを変えてみたら、ちょっと違ったのだ。今私の頭は変わってしまったから、もう一度あの電車に乗っても、きっと私はもうあまりハッピーだとは思わないだろう。もちろん電車の行き先には、ファイナルストップはない。これはライフ。私は誰にでも、この電車のライフがあると思っている。そして、いつかは、私もそろそろ、と電車を降りてさよならをする。... <笑> 乗り換えだっていつでもできる。次に乗る電車は新幹線みたいな速い電車かもしれない。

「電車のライフ」とは面白い考え方なあ、と思った。これが、初めのうちに私がイワンさんに見た型にはまることを疎み、規範に縛られまいとする自由な気質を感じさせたものではないだろうか。イワンさんは型にはまることを嫌がるのではなく、イワンさんにとっての「型」とは、出入り自由の「箱物」だったというわけだ。彼にとっての人生はいろいろな選択肢のあるところであり、まさに「電車」はその象徴と言えるのではないだろうか。「電車のライフ」では先に行くことも降りて違った景色を見て楽しむことも自由である。そして、その電車の行く先には終点というものがないというものも面白い。

どの電車に乗るかを選択するように今の自分の「生き方」を決める。自分の「生き方」は唯一ではない。それは「私の仕事」のあり方とも言えるだろうか。私の仕事を達成するためには、よい仲間、よい食べ物、よい飲み物が必要だ。私の場合で言えば、今は二つ目の電車に乗って、そしてちょうど一つの駅に降り、これまで見たことのない眺めに目を見張っていると言えそうだ。人生の時間をこんな風に考えてみたことはなかったが、なんだかワクワクする。次は、どんな電車に乗ろうか。そこでは、どんな人々と乗り合わせることになるのか。

イワンさんの「電車のライフ」になんとも言えず気持ちの安らぎを覚えた。私もいつか「私も、そろそろ...」と電車にお別れを告げる日が来るまで、自分が乗る電車をしっかりと選んでいこう。

3. 結論

イワンさんへのインタビューを終えて、はっきりと見えたこと。それは、「私の中に自由がある」という精神である。「自由」というのは何から自由になるかということをしっかり自覚することだ。イワンさんからの「自由とは何ですか」という問い返しがそのことに気づかせてくれた。どうも私は服を着替えるように「外の自由」ばかりを考えていたようだ。それが「自由な人」を憧れとしていた理由だろう。

そしてイワンさんの魅力は「中の自由」というものをしっかりと確立している人ならで

はのものだと思うようになった。彼に「私の中の自由」を意識させたきっかけは、幼年時代から受けた「Communist Ideology」かもしれないし、現在の彼が最も大切にしている「教会の思想」かもしれない。しかし、重要なことはきっかけではなく、イワンさん自身が「大切なことは object ではなく、考え続けることなのだ」という考え方を見出したことだ。常に彼は自分の中を見つめ、選択し、安定した幸せと平和を得ようとしているようだ。

学部生の頃、フロムの「自由からの逃走」を夢中になって読んだことを思い出した。私は、そこに書かれていた通りに「自由」という雰囲気の中に溺れ、「自由」とは自らが努力して求める結果得るものだというのを忘れかけた人だったようだ。急に私は自立や気ままな生活という「外の自由」ばかりを意識してがんばることは空回りするのではないかと思いついた。私は現在の日本社会での生活で本当に好きなことに没頭できる自由を享受しながら寂しさを感じていた。私の寂しさとはそれに気付かされた時に感じるやるせなさだったのではないだろうか。一人で出来ることをひとつひとつ増やすことが、自由に生きるための強さを備えるためのアプローチだ、とそれが私の「がんばる」ことの目的だった。しかし、イワンさんは「がんばる」ことに目的はいらないと言った。ライオンは生まれつきウサギを追いかけのように、人はがんばるものだ。そして、いちばん大切なことは「考え続ける」ことだ、と言ったのである。「いい仕事」をすることを目指すことが生活であるとも話してくれた。イワンさんのこれらのことばは私に新しい発見となった。私も「私の中の自由」を素直に見つめることを意識しよう。それは必ず人生のよい仕事へとつながる。

インタビューの終盤には、私はイワンさんに対して少年のようにお茶目でやんちゃな人だというイメージは持たなくなっていた。もっとも彼のお茶目さは変わらず感じるが、やんちゃだというその印象は「素直で純粹で強い人だ」という印象に変化した。それは「精神の自由」をしっかりと意識し、見つめてきた人が持つ魅力に他ならないのだろう。イワンさんのいう「中の自由」とは常に自分と対話しながら自らの理念や立場について考えてきた人ならではの視点だ。こうして私は、自由というものを生きる上でのひとつの理想のスタイルとしてしか見ていなかった自分のつまらない虚栄心に気づいた。

4. 終わりに

私はことばが好きだ。けれども、ことばを生み出す人はもっと好きである。既に述べたが人は人と共にしか生きられず、私と他の人との関係があるからこそことばは意味を持ち輝き始める。仮にこの世に自分しか存在しない状況になっても私は私であり続けるために「わたしのことば」を文字にして記録し続けるだろう。しかし、記録しても誰にも読まれることのないものなら、そこに残すことばはどんなに虚しいものだろうか。私にとってことばは人と人との関係性なくしては考えることのできない有機的なものである。

十月から三ヶ月余りをかけて「日本という社会に暮らすイワンさん」という人物を追ってきた。イワンさんの語ることばには常に人との関係性を見た。彼から「日本の社会」という特別な表現を聞くことはなかったが、イワンさんの故郷や国との強く深い関係性を伝えることばがあり、彼自らが取り結んできた関係も、そうでないものも全てを受け止めた上で彼が存在するのだということが確認できるものだった。彼へのインタビューを通し、私は彼を育てたスバルコ家の人々や彼の同郷の人々を温かく躍動するコミュニティーとして想像することができた。また学校時代の回想から始まったイワンさんの「精神の自由」

についての語りに、今を生きる彼が切り取った歴史や社会のひとつの現実に触れ深く感銘を受けた。その感銘は私と家族、私と地域、私と学校、私と日本へと連鎖し、我が身を振り返ることへとつながった。インタビューに丁寧に答えてくださるイワンさんが民族や国家を語らずして「ウクライナ人」であることの誇りや、「ソ連」と呼ばれていたかつての共同体としての「ロシア人」への帰属感を表現するのを受け止めたからである。このクラスでも時に「日本人」とは誰なのか、「民族性」とは何か、「国民性」はあるといえるのか、など本質に迫る議論をした。そのような場合、一般化に過ぎる言説は受け取る者の心を動かさない。発言から「私達」とか「多くの人」などを全てそぎ落とせば、そこに残るのは自身が責任を取ることで残る。私が考えたことを他の人に受け止めてもらうには、常に発信のユニットとしての私を認識し、自分がどのような立場で考え、どのような根拠でことばを選び発信するのかという問いを絶えず自分自身に立てていかなければならない。生きたことばは、必ずその人が共に生きる人やコミュニティとの関係とともに語られる。語り手がつながる、あるいはつながりたいと思う社会がそこには存在すると感じた。

それでは、ことばは常に「社会」を背負ってしまうものだろうか。これには「そうだ」と答えることもできるし、「そうでない」と答えることもできるのではないかと思う。それは聞くものの認識によって左右されてくるだろう。ことばは語り手から送り出されたその時から、すでに語り手だけのものではなくなる。つまり「関係性」を結ぶ相手がどのように受け止め、解釈をするか。全てのことばは聞き手を通して「解釈」をされ、それが背負う社会という概念も百人いれば百通りの有様を示すだろう。そこで、社会というものを考えるならば、確かに顔の見える一対一のことばによる関係性がコミュニティの第一歩となり、想像可能な大きなコミュニティへの入り口となるのではないだろうか。顔の見えるコミュニティの無限の連続が、多くの人々が「社会」と呼ぶ共通概念となるのではないかと考える。どんな人にも生きる場として社会があることは誰にも否定のできない事実だ。私はイワンさんへのインタビューを通し、「日本社会に暮らすイワンさん」というよりも、むしろ「ともにこの社会に暮らすイワンさん」を実感した。彼のことばを通してスバルコ家の人々、ウクライナの小さな町、モスクワの町、ソ連、ロシアなど、これまで知ることもしなかった、あるいはメディアでしか知りえなかった「コミュニティ」が身近に存在する人という接点からその連続の先に存在するのを感じたからである。同時にクラスでは互いのレポートを練るという活動を通し、各人が惹かれた魅力的な人物を共に訪ね、さらにはその人物に迫ろうとするインタビュー自身の内面に触れ、共に思考しているような不思議な感覚を体験した。これも連続する社会につながったという体験のひとつとは言えないだろうか。このクラスでの言語活動は、まさに凝縮した形で「わたしのことば」を探し、選択し、発信し、練られ、反芻を繰り返すことで人とつながる体験を与えてくれた。この実感をこれからも大切にして「ことば」というものに意識的でありたいと思う。

最後に、六時間にも亘るインタビューに粘り強くご協力くださいましたイワンさんに心よりお礼を申し上げます。

また細川先生、三代さん、塩谷さんをはじめ NJB クラスのみなさま一人一人にお礼を申し上げます。みなさま、ほんとうにありがとうございました。